



舛田 玲香さん(棚塩)

取材者：浪江町役場 佐々木・嶋原
取材日：9月5日

“笑顔になれる作品であること”浪江から世界へ



▲舛田さんと“Fly ME to The Moon羊羹ファンタジア”パッケージ原画

会津若松市老舗和菓子店の新商品パッケージに作品を描きおろし、浪江出身の日本画家として注目を集めている舛田さん。子どもの頃、海を眺めながら想像した異国の動植物を、海外で実際のものとして見たことが舛田さんの作品のテーマになりました。鮮やかで愛らしく力強い作品は、その感動から生まれています。“楽しい気持ちで描いたものを見た人が楽しい気持ちになってくれれば”というぶれない強い思いが、福島から世界へとつながる未来を照らしてくれるようです。

海が近い家で育った私は子どもの頃から海を眺めて、その向こうの日本と違う世界を想像して憧れていました。こんな生き物がいたらいいなと、空想画をよく描いており、成長とともに本格的に絵を勉強したくなっていました。日本画を学ぼうと決めた理由は、その独特な画材に興味を持ったからです。天然の石を砕いた絵の具や金箔などを使って描く日本画は、作品がキラキラと輝きを放っており、その美しさと伝統技法の数々に惚れ込んでしまいました。大学で描いた作品の多くは実家がありました。卒業間際の震災。実家は津波に遭い、作品は失ってしまいました。友人を頼り、しばらく札幌に避難しました。避難先では、作品制作からは離れたものの、絵をやっていることを職場で話したことから、医療関係のイラスト、論文の挿絵を頼まれて描いていました。海外に初めて行ったのは2013年の11月。きっかけは、パプアニューギニア

で話したことから、医療関係のイラスト、論文の挿絵を頼まれて描いていました。海外に初めて行ったのは2013年の11月。きっかけは、パプアニューギニア

で友人が立ち上げた英語の本を寄附するプロジェクトにボランティアとして参加したことです。震災をきっかけに絵を続けることに迷いがあつたのですが、生きている自分は本当にやりたいことに挑戦するべき。そのためには、描きたいものを現地ですぐに目にしておかないと自分が満足したものが生み出せないのではという想いがあり、思いきって渡航しました。初めての異国の地なのに、どこか懐かしい気持ちで小さい頃の自分に戻れた、やっとここに来られたという思いに駆られました。幼い頃から海を見て想像していた、個性豊かな動植物が鮮やかに暮らす美しい世界が、目の前に現実として広がっていたのです。その後、オーストラリアを旅してから帰国し、半年後の2014年の春、ワーキングホリデーでシドニーへ。自己の制作活動のほかにデッサン指導をしたり、在豪日本人主催の震災復興支援イベントでは作品展示をしました。大自然の中で、すぐそこに虹色のインコがいたり、野生コアラがいたり、まるで動物園に住んでいるような素晴らしい環境でした。一つひとつ進んでいくうちに、出会いによって思いが人に伝わりつながり、日本画を通して伝えたいことが広く発信されるようになってきました。

心の扉を全て開け放って描く作品を見てもらうことは、心そのままを見てもらうことと同じで、いつも勇気をもって展示しています。美しいものは笑顔にさせる、癒す力がある。絵を見た方から頂いた言葉が胸に沁みわたりました。浪江という豊かな自然環境で育ったからこそ、綺麗な絵を描けるようになった。国境のない理想郷を表現した作品で、国内外で活動していきたいです。そこで福島の良さも伝えていきたいと思っています。楽しい気持ちで描いた絵は、見た人を楽しみ気持ちにさせてくれる。そう信じて、これから



▲小学生の頃の帰り道を描いた“かえりみち、東の空”(2015公募ふるさとの風景in喜多方 入選)

浪江のこころ通信

・第76号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散避難をしています。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるため一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されています。

この“浪江のこころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信/第76号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0240(34)4593





▼盆踊りの様子



▼茶話会の様子



『十日市祭』見学や交流会などを
楽しんでいきます。これからも
みんなで集まって楽しく過ご
し、元気を分かち合える会であ
り続けることを願っています。

澤田さん 私は皆さんより3年、
4年遅れて参加するようになった
が、浪江町で懇意にしていた方が
「大友さんという人がつくばに
行っているから、その人を頼って
行きなさい」と言われたのがきつ
かけて参加するようになった。
こっちに来た当時は、家にこもり

三浦さん やっぱり市役所から
の話と、大友さんにこういふ会が
あるから参加しないかと誘われ
て、最初はどうしようかと迷った
が、車に乗せて行くからというの
が最初で、それからずっと参加し
ていて、今では兄弟以上の付き合
いになって来ている。

門馬さん つくば市役所に集
まったのがきっかけで、この会
に参加するようになった。避難
してきた当時は無我夢中で過ご
して、いろいろ考える余裕がな
かった。年数が経っても、何が
なくてもストレスは溜まる一方
で、この気持ちは当事者にしか
解らないと思う。

◆元気づく場会に参加して
大友さん 市役所主催の交流サ
ロンで、古場さんがつくばでこ
の会を立ち上げるので参加して
ほしいとの誘いがあった。当時
は右も左も分からない状況だっ
たし、地元の人と話す時は福島
から避難してきていることを話
すのが辛かった。浪江弁で気楽
に話せることが楽しみで発足当
時から毎月参加している。

**◆浪江町には帰りたいと思いま
すか**
門馬さん 帰りたい気持ちはあ
るけれど、帰れない。帰っても
どうしていいかわからない。家
もない、これから建てることも
できないので、このつくばに住

◆会の今後について
伊藤さん 会も7年になるが、
先程のように交流会の最後に盆
踊りを楽しんだりして、雰囲気
が素晴らしいし自慢できるので、
ぜひPRしてほしい。補助金も
町や県に申請しているが、いつ
まで貰えるのか不安もある。

古場さん 最近、「補助金がなく
なったら、会の運営をどうする
のか」と皆さんと話合った
ことがあるが、「参加費を自己負
担しても良いので、会の活動を
続けてほしい」という声も多
く、その状況に至った時点で、
何かしら会を維持できる方法を
見つけて存続させていこうと考
えているところです。

きりで、ぼーっとしてばかりで変
なこと、最悪のことばかり考えて
いたが、この会に参加するようにな
って、そういった考えから抜け
出すことができた。
古場さん 避難当初からしゃべ
り場の開催に至るまでの1年余
り、家族以外の人と会話する機
会がほとんどない状態でした
が、会を立ち上げてからは、皆
さんのおかげで元気をいっぱい
いただいています。

◆最後に
古場さん この会に参加されて
いる方たちは、お互いに元気を
分かち合っており、これから
も、元気づく場で、いい仲間た
ちと楽しく交流していきたいと
願っています。つくば市や周辺
の市町村に避難していて、交流
の機会を希望される方がいらっ
しゃいましたら、ぜひご連絡く
ださい。
私たちはいつでもお待ちしております。

◆会の運営
古場さん 会員登録者数は約
100名です。ピークの時期よ
りは減ったものの、会の創設当
初よりは増えています。
会報を毎月50世帯以上に送付
し、そのうち活動に参加される
のは、その時々で差はあるもの
の30名程度です。参加者はいつ
も来られる方が多いのですが、
新たにつくば市に移転してくて
口コミで参加される方も増えて
います。

◆会の立上げ
古場さん 2、3か月ごとに、
つくば市役所で開催されていた
避難者サロンでは、多くの避難
者が説明を聞きに来ていました
が、知らない人ばかりなので、
説明が終わると潮が引くように
皆さんが帰ってしまい、何か寂
しい気持ちになりました。
そのような思いは、交流サロ
ンに参加したほかの避難者の皆
さんも同様だったようで、「お茶
でも飲みながら、お話できる場
を作ってもらえないか」との声
も聞こえてきました。どこに
誰が住んでいるのかも分からない
状況では、「無理です」とお断
りするしかありませんでした。

結果は残念ながら不採用でし
たが、計画段階で、原田直之さ
んとつながりを持つことがで
きたことが大きなチャンスとな
り、それならば自力で開催しよ
うと決心しました。
結果は残念ながら不採用でし
たが、計画段階で、原田直之さ
んとつながりを持つことがで
きたことが大きなチャンスとな
り、それならば自力で開催しよ
うと決心しました。



元気づく場会 (いい仲間つく浪会)

- 代表 **古場 泉さん・容史子さん**ご夫妻(幾世橋)
大友皓示さん・静子さんご夫妻(大堀)
門馬久敏さん・信子さんご夫妻(請戸)
三浦秀一さん・和加子さんご夫妻(権現堂)
澤田俊子さん(加倉)・伊藤幸治さん(川添)

取材者：茨城NPOセンター・ commons 菊池 / 浪江町復興支援員茨城県駐在 中嶋
取材日：7月22日

帰りたいけど帰れない…。気持ちが沈みがちになるけれど… そんなときには、「元気づく場」にみんなで集い、 お互いに元気を分かち合っています。



▲左から、門馬信子さん・三浦和加子さん・澤田俊子さん・
門馬久敏さん・大友静子さん・大友皓示さん・三浦秀一さん・
伊藤幸治さん・古場泉さん・古場容史子さん

2012年6月に古場さんご夫妻が立ち上げた元気づく
場会 (いい仲間つく浪会) も今年で6年目に入っていま
す。毎月定期的に開催している茶話会をメインとして、
コンサート、収穫祭、バスツアーなども計画して浪江町
民はもちろんのこと、双葉町や富岡町など様々な町の人
たちが集まり交流を深めています。
今日(取材日)の交流会では、午前中に生でも食べら
れるトウモロコシの収穫祭、午後の茶話会では浪江弁で
楽しくお話し、最後はみんなで「相馬盆歌」や「炭坑
節」を踊って充実した楽しい1日を締めくくりました。
交流会終了後に浪江町民の方々に残っていただき、イ
ンタビューさせていただきました。

◆会の立上げ
古場さん 2、3か月ごとに、
つくば市役所で開催されてい
た避難者サロンでは、多くの避難
者が説明を聞きに来ていました
が、知らない人ばかりなので、
説明が終わると潮が引くように
皆さんが帰ってしまい、何か寂
しい気持ちになりました。
そのような思いは、交流サロ
ンに参加したほかの避難者の皆
さんも同様だったようで、「お茶
でも飲みながら、お話できる場
を作ってもらえないか」との声
も聞こえてきました。どこに
誰が住んでいるのかも分からない
状況では、「無理です」とお断
りするしかありませんでした。

結果は残念ながら不採用でし
たが、計画段階で、原田直之さ
んとつながりを持つことがで
きたことが大きなチャンスとな
り、それならば自力で開催しよ
うと決心しました。

イベントの自力開催を遂行す
るには、一定の組織が必要と考
え、現在の『元気づく場会(い
い仲間つく浪会)』の立上げにつ
ながっていきました。

交流会は毎月1回開催し、10
時から15時まで茶話会とイベン
トを開催していますが、筑波大学
生の音楽演奏、市民サークル的
なパフォーマンスや体操教室な
どその時々多彩な「お楽しみ
会」を加え、マンネリ化しない
よう工夫をしています。最近で
は、よりつくばを知ってもら
うために、つくば市内の農園を
回って『ミニ収穫祭』を企画す
ることも多くなってきました。
今日は「トウモロコシの収穫
祭」、先月は「ブルーベリー収穫
祭」と、大変好評でした。
毎月の活動はつくば市周辺で
実施していますが、一年に一度
は、補助金等を活用して、福島
県内へのバスツアーを企画し、